

第2章 平地城館・環濠集落の検討

第1節 平地城館

<p>淀川と神崎川の分岐点に位置する城</p> <p style="text-align: center;">え ぐち じょう</p> <p>① 江口城</p>	<p>【所在地】東淀川区南江口 【標高】3～5m 【年代】天文18年(1549) 【城主】三好宗三 【交通アクセス】Osaka Metro 瑞光四丁目駅より徒歩10分</p>	
---	---	--

【概要】天文18年における江口合戦の際、三好宗三が籠城して三好長慶に対抗した。その所在地は特定できないものの、近世・近代の地誌類からその手がかりが得られる。

【立地】淀川と神崎川の分岐点にあたり、淀川交通の要所であった。神崎川を隔てて対岸に通じる江口の渡し場が存在したことが、近世・近代の絵図類から確認できる〔例えば、個人蔵・大阪市史編纂所寄託 江口乃里文書より『江口村悪水井路筋絵図』元禄16年(大阪経済大学2002所収)や、大阪府立中之島図書館蔵『東摂城址図誌』(中村2007所収)など〕。巖島神社跡(第2江口町会館敷地、図3-C)には「左 京道 わたし」の道標が現在も残り、やはり当地に渡し場が存在したことが確認できる。

【歴史】中世前期には大江匡房が『遊女記』で記すように人の往来が盛んな場として著名であったが、中世後期における兵庫や堺の発展に伴いその地位を奪われ衰退したと考えられている。ただし、交通の要所であることに変わりはなく、関所が存在していた(平凡社地方資料センター1986)。天文18年(1549)における江口の戦いは、三好長慶が細川晴元の支配を脱し戦国大名として台頭する端緒となった戦いとして著名であり、その際に江口城が戦場となっている。以下、軍記史料に拠りながらその経過を述べる。細川晴元・三好宗三と三好長慶の対立が深刻化するなかで、同年5月ごろ晴元・宗三は三宅城(現茨木市)に、三好宗渭は榎並城に入っている。6月11日に宗三が江口城へ移ったこと受けて、これを好機と見た長慶方は、三宅城と江口城の間の「通路」にあたる「別府の川がた」に陣取り、両城の間の交通を封鎖している。その際、十河一存・安宅冬康・淡路海賊が動員されていることから(①-1)、水陸両面での封鎖であったと思われる。別府は現在の摂津市に比定され、旧神崎川に面した集落であった。この記事から、三宅城と江口城を結ぶ交通路、おそらく街道が整備されていたことが読み取れる。一方、晴元が籠る三宅城を攻めていた十河勢は反転して江口城攻略に向かい、淀川の東の岸から江口城を望む位置に陣取っている。『足利季世記』は、江口城の様子を「流水逆巻、岸にたたへ、わたるべき様なかりし」と記している(①-3)。また、『万松院殿穴太記』は「四方に大河渺々として、沙頭みちせばきに、波うち際迄逆茂木を引かたりければ、容易く敵も寄せ難し」と記す(①-4)。このことから、江口城は淀川・神崎川の流れを巧みに利用した城であったことが想像できる。四国海賊が渡河したことを契機に十河勢がそれに続き、江口城の「西の木戸口」が破れて守備隊の別府左衛門(①-5)は敗走した。さらに、三好長慶は丹波堤を筋違いに進み、江口城の東の木戸へ押し寄せている(①-4)。対する宗三は渡河して敗走しようとしたところを討ち取られた(①-3)。かくして江口合戦は、長慶方の大勝利に決着した。江口合戦以降、江口城は史料上で確認できないこ

とから、ほどなく廃城となったと思われる。

【評価】江口城の所在地は特定できないものの、近世・近代の地誌には江口城の所在地を記すものが複数存在する。寛政8年～10年（1796～98）の『摂津名所図会』は江口村の里長田中氏の屋敷とする（①-7、図3-A）。大正4年（1915）の『西成郡史』は、田中氏邸よりも北側の高台という（①-8）。大正11年（1922）の『大阪府全志』は字「宮の城」にあったといい、「古器」の出土を報告している（①-9、図3-B）。昭和31年（1956）の『東淀川区史』は、先述の厳島神社跡にあてる（①-10、図3-C）。各書の比定地にはばらつきがあるものの、江口城の所在地はおおむね江口村の居村あたりと認識されていたことがわかる。軍記史料に記されるように川に面した立地であったとすれば、旧江口村居村あたりは江口城の所在地としてふさわしいと言えよう。なお、『東摂城址図誌』が指摘する小字「宮ノ代」「走り堀」「カラ堀（荒堀）」は、地籍図（個人蔵・大阪市史編纂所寄託 江口乃里文書より「江口村字限図」明治9年）では「宮ノ代」「走折」「荒堀」として記載がされている。なお、「宮ノ代」は、『大阪府全誌』のいう「宮ノ城」と同じ場所を指すと思われる。以上のことから、当地に江口城が存在した可能性は十分にある。当地に江口城が築かれ、さらに江口合戦における戦場となったとすれば、淀川の分岐点にあたり、なおかつ渡し場を経て北摂や京都方面への連絡が取れるという、交通の要地であったことによると考えられよう。〔岡本〕



図2 『東摂城址図誌』より江口城跡

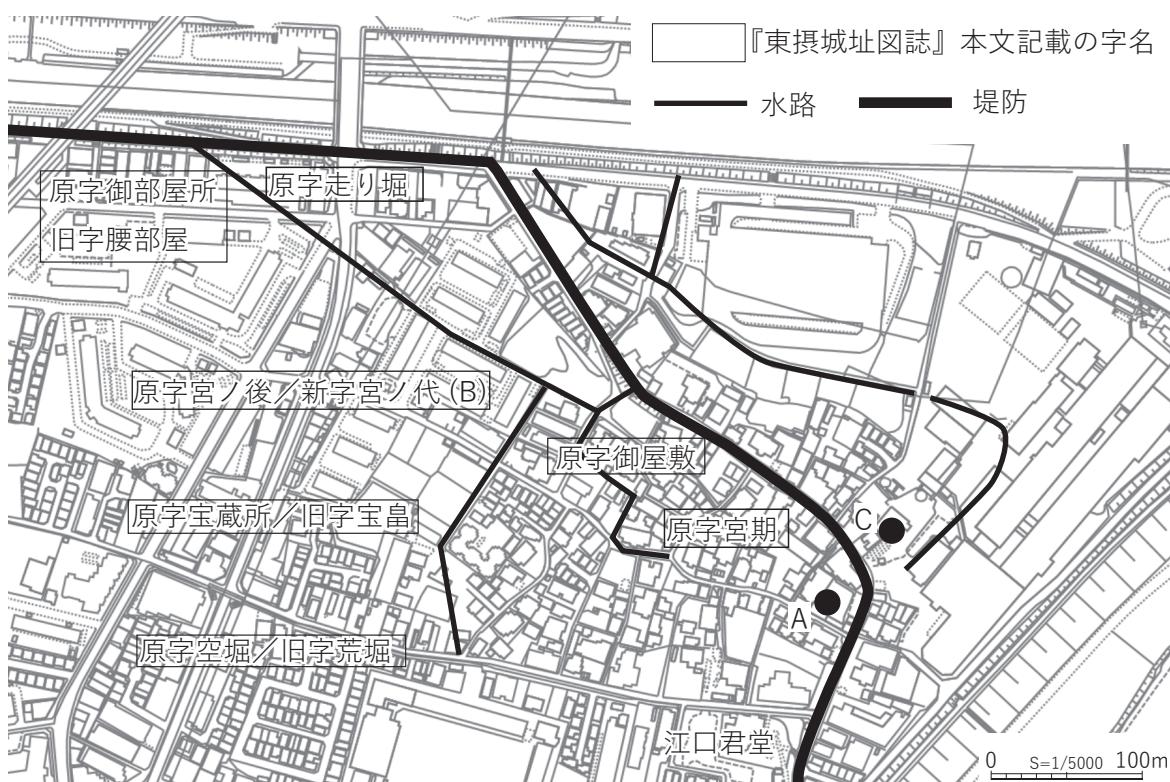


図3 江口城推定地の位置図

中川清秀の伝承を持つ

しん じょう じょう

② 新庄城

【所在地】東淀川区下新庄
【標高】3m
【年代】天正年間
【城主】中川清秀
【交通アクセス】阪急下新庄駅すぐ



【立地】神崎川の自然堤防に位置する微高地上に下新庄集落がある。その東側を高槻から柴島方面に向かう高槻街道が通過する。

【歴史】新庄城は1次史料に現れない。『西成郡史』における新庄村のうち大字上新庄の項は、中川清秀による築城伝承や、「天守址」の字名、明教寺の山号「城置山」は城に由来することを記している(②-1)。『大阪府全誌』にも同じ内容の記載がある(②-2)。



図4 下新庄集落の仮製図

(清水編 1995 所収図に加筆)

【評価】「天守址」の小字は地図上では確認できない。城跡に築かれたとされる明教寺のみがその所在地の手がかりとなる。もし明教寺付近に新庄城が存在したとすれば、下新庄集落が立地する自然堤防上のうち、街道に最も近い場所が選ばれた可能性がある。[岡本]

発掘調査で中世の遺物が出土した、淀川右岸の方形居館

くに じま じょう

③ 柴島城

【所在地】東淀川区柴島
【標高】4m
【年代】天文 18 年 (1549)、元和 2 年 (1616) ?
【城主】細川晴賢・三好宗三、稻葉紀通?
【交通アクセス】阪急柴島駅すぐ



【概要】天文 18 年における戦いの際に使用されているほか、江戸時代初期にも中島城として使用された可能性がある。近年、地籍図等に基づいて所在地が比定された。その比定地が発掘調査されているものの、城館関連の遺構が見つかっているわけではない。

【立地】中津川と淀川が分岐する地点の、北側の川岸にあたる。地形的には崇禪寺浜堤の一画にあたり、発掘調査では砂質の基盤層が検出されている(大阪市文化財協会 2002b)。

【歴史】天文 18 年 (1549) 3 月、柴島城に籠る細川晴賢・三好宗三を三好長慶が攻め、城の西方に位置する浜村(現在の柴島 1 丁目)で合戦があった(③-1・2)。敗れた細川晴賢・三好宗三は榎並城へ敗走している。同年 6 月の江口の戦いの前哨戦に位置づけられる戦いである。一方、『摂津志』(③-3) や『東摂城址図誌』は、稻葉氏が最後の城主とする。その稻葉氏(紀通)は、元和 2 年 (1616) に摂津国中島へ移封されるとの史料があるものの(『徳川実紀』卷 44、『寛政重修諸家譜』)関連は不明である(中西 2017)。

【評価】大正 4 年 (1915) の『西成郡史』において、現在の柴島中学校周辺に「本丸」など城郭関係

の字が存在することが指摘されている（③-4）。さらに石川美咲は、明治期地籍図を参照すると字「本丸」の範囲が復元でき、『東摂城址図誌』に描かれた方形居館が実際にこの地に存在したと考察する（石川 2016a）。これらの研究から、柴島城は柴島中学校の周辺に存在した可能性が高いと思われる（図1）。

当地は「字本丸」よりも北側に位置する法華寺が、奈良時代に建てられた摂津国分尼寺の流れをくんでいるという伝承をもつことから、「摂津国分尼寺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地とされている。平成12年（2000）には、柴島中学校の敷地で発掘調査が行われている（KN00-1次調査、大阪市文化財協会 2002b）。従来の研究ではこの発掘調査成果と歴史地理的手法による城郭研究が相互に参照されていなかった。このような問題意識から、柴島城跡の一角にあたると考えられるKN00-1次調査地の成果を紹介する。結論から述べると、当地が柴島城跡に特定される証拠が発見されているわけではない。砂質の基盤層の上層に鎌倉時代後半から江戸時代初期にかけての遺物包含層が見つかっており、瓦器椀や土師器鍋、瀬戸美濃焼皿や唐津焼碗などの土器・陶磁器の出土がある。さらに、瓦や五輪塔地輪の可能性のある花崗岩製の石造物が出土しており、付近に寺院等が存在した可能性がある。報文では、遺物包含層の成因について、洪水による土砂の廃棄や淀川護岸工事の結果形成された可能性が指摘されている。当地が中世の柴島城や近世の柴島集落に比定されることを踏まえると、盛土を伴う工事は柴島城や柴島集落の動向と無関係ではないだろう。今後も柴島城の実態を解明する観点で、当地の調査を進めていく必要がある。〔岡本〕

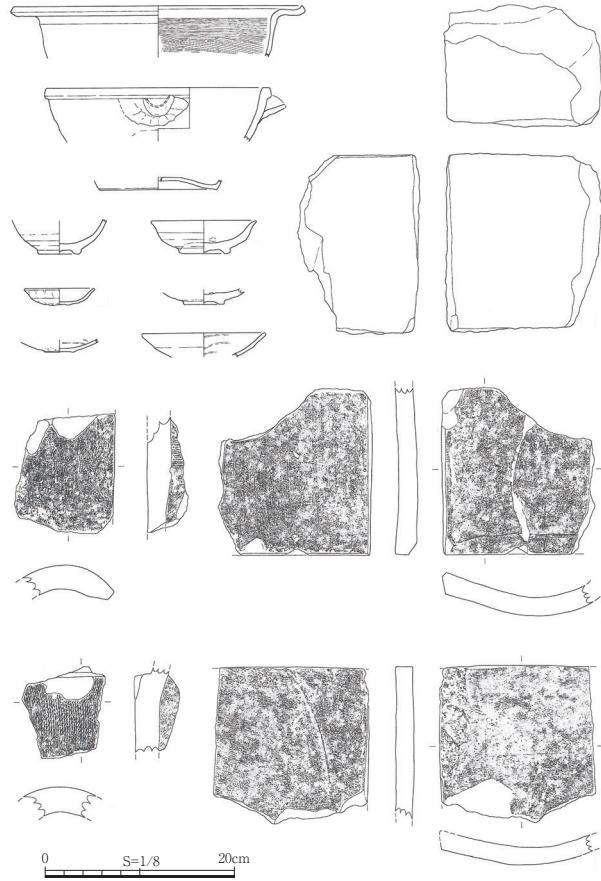


図5 摂津国分尼寺跡（KN00-1）出土遺物（大阪市文化財協会 2002b）

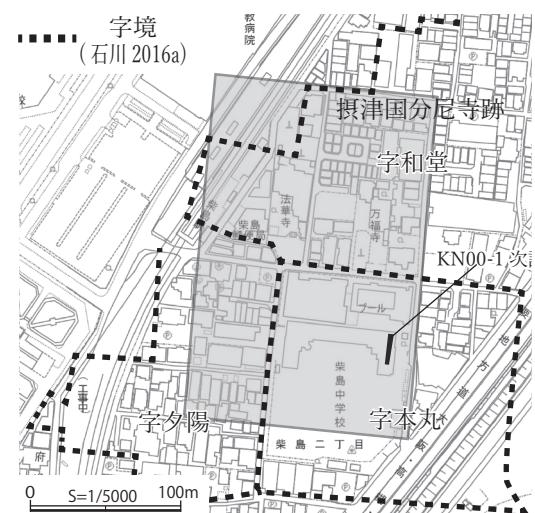
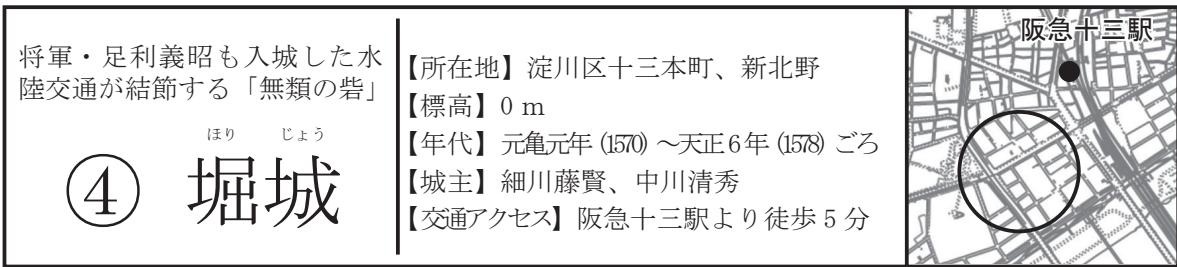


図6 柴島城推定地の小字と発掘調査地



【概要】堀は、現在の阪急十三駅からみて西側にかつて存在した村である。元亀元年(1570)以降の大坂本願寺合戦の際に本願寺方と織田方が争奪を繰り返したのが堀城であり、将軍・足利義昭も一時期入城していた。

【立地】中津川の自然堤防上にあるものの、標高0mほどである。中国街道が通過する交通の要衝に位置する。

【歴史】天文18年(1549)の江口合戦は、三好長慶・遊佐長教と三好宗三・宗渭との戦いであり、宗三・宗渭方の城として「中島城」が登場する(④-1・2)。「中島」とは、「西成郡の神崎川と中津川、中津川と淀川(大川)に挟まれた島型の地」(平凡社地方資料センター1986)を指すことからその範囲は広域である。したがって、江口合戦の際の「中島城」の所在地は、堀であった可能性も否定できないものの、広い中島地域のどの場所であったか不明と言わざるを得ない。

堀城の存在が確実に確かめられるのは、元亀元年(1570)の野田・福島の戦いに端を発する大坂本願寺合戦においてである。同年7月に三好三人衆が天満森、次いで野田・福島に移り、8月17日には古橋城(門真市)を攻略したことを見て、将軍足利義昭は9月4日に京都を出発し、細川典厩藤賢の城であった「中島の内、堀と申所」に入り、三人衆方に対峙する。同10日には「典厩城の前中津川」に船橋を懸けている(④-4)。この記述から、堀城のすぐ近くを中津川が流れていったことがわかる。『陰徳太平記』によれば、義昭は2,000人の旗本を伴って堀城に入ったとされる(④-5)。次いで天正4年(1576)5月19日の下間頼廉書状によれば、本願寺方により中川清秀が守る堀城が奪取され、それを見て清秀が反撃したものの奪還できなかつたとある。書状のなかで頼廉は堀城を「無類之取出」と絶賛しているが(④-11)、その内実は明らかではない。天正6年12月11日には、中川清秀に荒木村重攻めのための中島の付城を命じられており(④-14)、堀城が使用された可能性がある。大坂本願寺合戦以降の史料に堀城の記載が確認できることから、合戦終結後に間もなく廃城になったと思われる。

【評価】絵図や先行研究を参考にすると、堀城の候補地は複数あることがわかる(図11のA～C)。それらの候補地が堀城の場所としてふさわしいかどうかを順に検討する。

Aは行政によって周知された埋蔵文化財包蔵地「堀城跡伝承地」の範囲である。ここには現在、武田薬品の大坂工場などがある。明治期には水田であった(図1)。この場所は、「中島大水道」という水路が屈曲する場所の南東の区画にあたる。中島大水道とは、このあたりが低湿地であり水害に悩まされていたことから、延宝6年(1678)に排水のために掘削された水路であった。現在は市街地化に伴い埋め立てられ道路となっている。したがって、この区画は江戸時代より前にはさかの

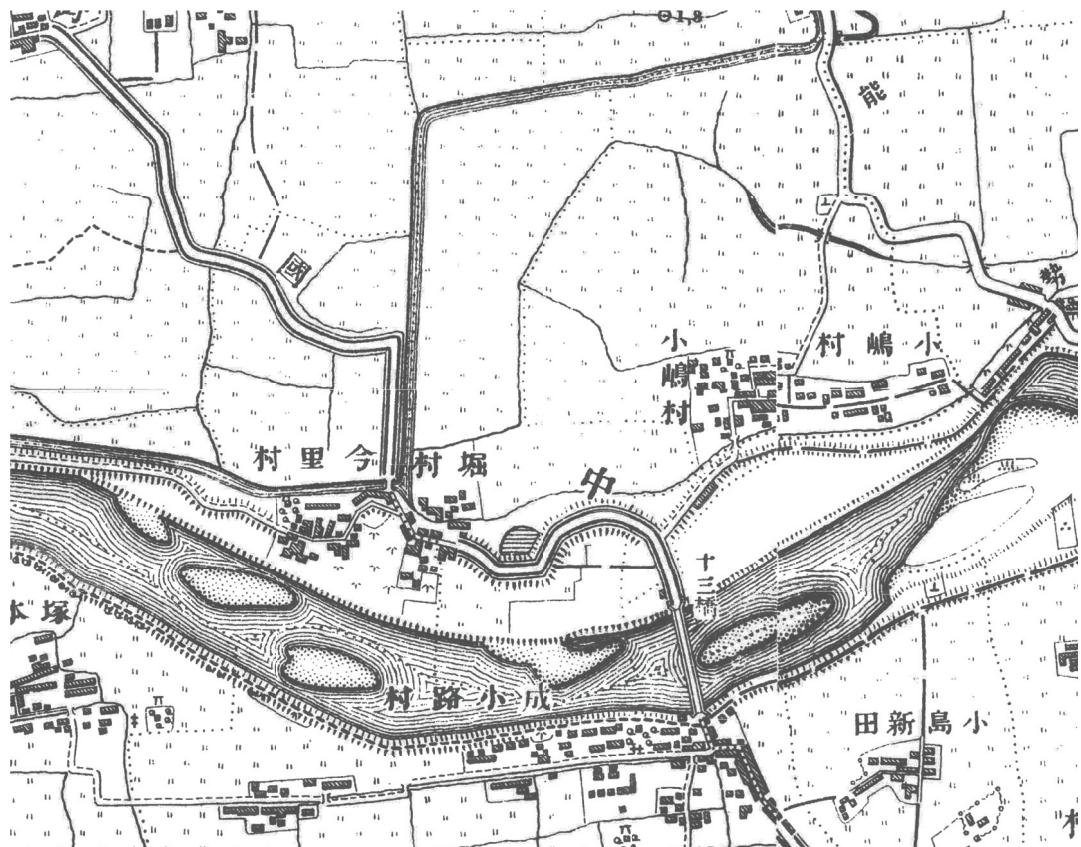


図7 明治期仮製図 清水編 1995より

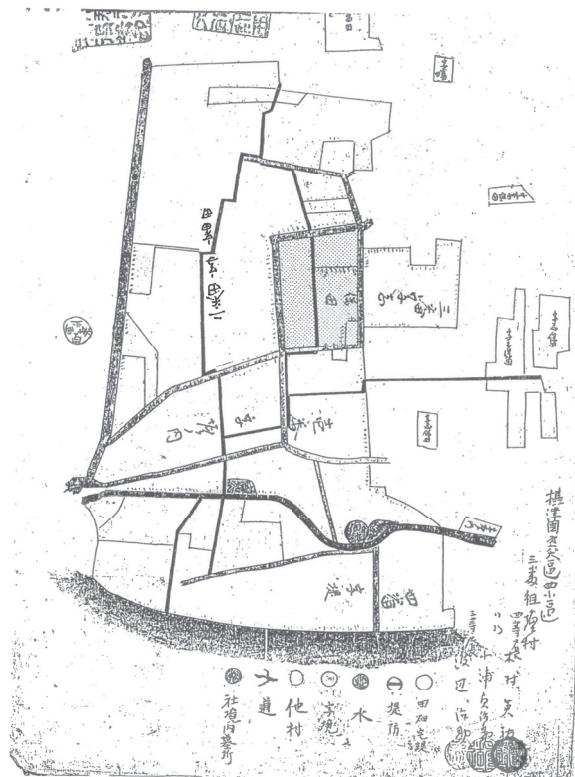


図8 堀村地籍図（明治8年） 前田 1989より

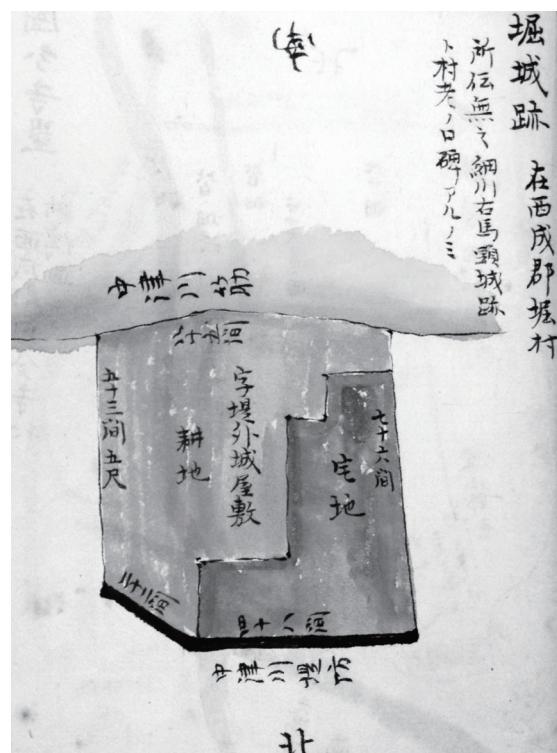


図9 東摂城址図誌（大阪府立中之島図書館蔵）より堀城

がらないので、堀城の場所と考えるべきではない。実際、この場所では平成14年（2002）の工事の際に立会調査がされているが、遺構や遺物は見つかっていない（HR02-01 次調査）。

Bは前田豊邦が推定した堀城の位置である。小字「富田」や「志保田」の範囲に含まれている。前田は明治8年の地籍図をもとにして、「比較的整然とした方形区画」があるBが堀城の場所にふさわしいと考えた（前田1989）。ところが、Bは現状で屈曲した街路に取り囲まれており、整然とした区画がこの場所に存在したとは考えにくい。これは、前田が参考にした地籍図（図8）が簡略で、水路の屈曲を丁寧に表現しなかったことによると思われる。また、Bはこの周辺で比較的標高の低い場所に位置している。このあたりが低湿地であったことを考えると、標高の低い場所は暮らしにくく、城を築くのに合理的な場所ではない。したがって、Bは堀城の場所としてふさわしくない。

Cは中津川堤防の内外に位置している。近世堀村の居村にあたり、「中津川図」（大阪歴史博物館蔵、図10）には堤外地に集落や耕作地が広がっていた様子が記されている。また、地籍図や、明治期に著された『東摂城址図誌』（図9）のなかで、「堀之内」「堤外城屋敷」の字が記録されている場所である。いずれも城に関係する可能性がある地名である。また、先述の通り『細川両家記』には、堀城の前に中津川が流れていたとの記述がある。Cはまさに中津川畔であり、その状況に一致している場所といえる。以上の条件から、Cが堀城の場所にふさわしいといえる。

Cが堀城の場所とすると、その立地はきわめて理に適っていたと言えそうである。Cは中津川が形成した自然堤防に位置する微高地上にあり、この地域の交通の要である中国街道がここを通過していた。さらに、中津川の渡河点に面した場所でもあり、南北朝期にはすでに十三の橋が成立していたと想定されている（大澤2017）。中津川における水上交通が存在したとすれば、水上交通と陸上交通の結節点であった可能性もある（岡本2023a）。〔岡本〕

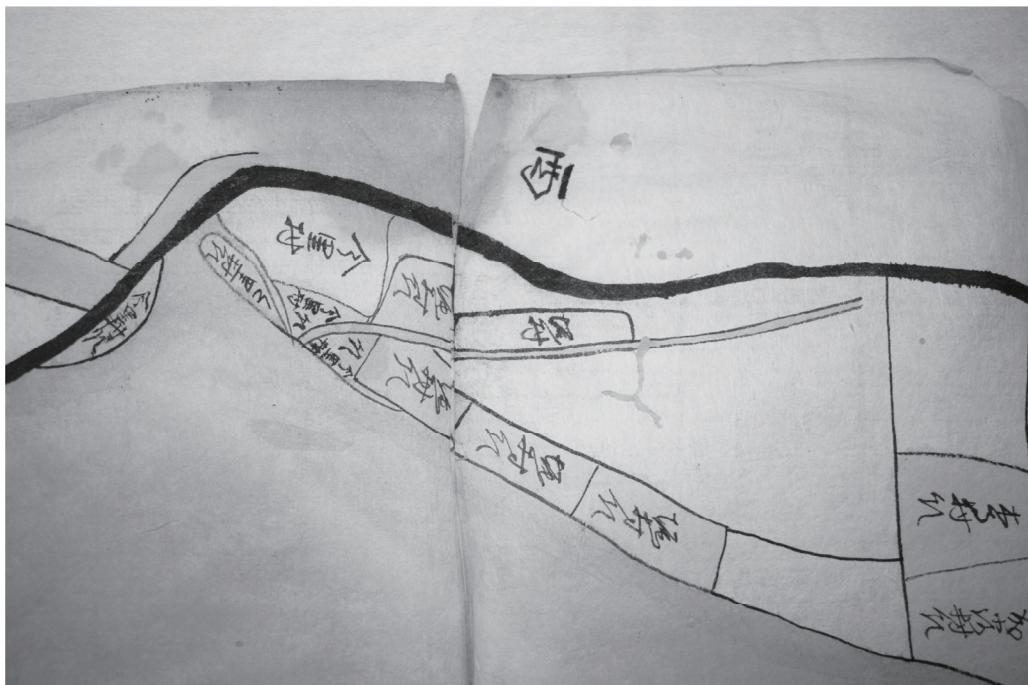


図10 中津川図（部分） 大阪歴史博物館蔵



図 11 堀城推定地の位置

神崎川右岸の平地城館 み つ や じょう ⑤ 三津屋城	【所在地】淀川区三津屋中 【標高】0.4m 【年代】不明 【城主】不明 【交通アクセス】阪急神崎川駅より徒歩5分	
-----------------------------------	--	--

【概要】三津屋城は楠木氏や三好氏の城として近世地誌に現れる。その存否は明らかでないものの、近世三津屋集落が位置する微高地上に存在した可能性がある。

【立地】北中島に位置する低湿地に位置しており、北に神崎川が流れている。集落の南側を中国街道が通過しており、西に加島村、南東に堀村へ通じている。

【歴史】三津屋城について記した同時代資料は、存在しない。『摂陽郡談』は、三好宗三が在城しており、天文18年(1549)6月24日に戦死したと記している(⑤-1)。一方、『摂津志』は、楠木氏に始まり三好氏に終わるとのみ記している(⑤-2)。『西成郡史』は、楠木氏を正行、三好氏を長慶に当てている。さらに同書は、明和7年(1770)の『諸国廃城考』における中島城の項目を引用したうえで、「中島城は確かに此の三津屋城に相当するや疑ひあるべからず」とする(⑤-3)が、大正11年の『大阪府全誌』はこの見解について「従い難し」とする(⑤-5)。ただし、いずれもその根拠を明示しているわけではない。『摂陽郡談』が三津屋城跡に比定する光専寺は、楠木正行の末裔・末広治郎左衛門尉が開創したこと伝えており(⑤-3)、その末広氏は蓮如に帰依していたという(⑤-4)。なお、『大阪府全志』は光専寺の位置する字地を「城の前」とする(⑤-4)が、同寺について地籍図で確認できる字名は「馬洗」である(図12)。

【評価】先述のとおり三津屋城に関わる興味深い伝承が複数存在するものの、同時代資料による裏付けがない。また、三津屋城跡伝承地における発掘調査において、現状では三津屋城関連遺構の検出が報告されているわけではない。したがって、三津屋城の存在は確定的ではない。

一方で、その地形環境を考慮すれば、当地に中世城館が存在した可能性は十分にある。三津屋集落の南側には中国街道が通過している。中国街道は中世前期の段階で成立していることが想定でき(大澤 2017)、当地に城館が成立する前提条件となる交通路が存在したといえる。交通路が成立するためには当地が十分に陸化し地形的に安定しているはずであり、実際この地の北を流れる神崎川は中世前期の段階である程度流路が固定していたと考えられる(大阪市文化財協会 2023)。以上のことから、当地には城館等が築かれてもおかしくない地形的な条件があったといえる。

さらに、近世三津屋集落北側にあたるMT15-1次調査地では、16世紀段階の土坑群の検出が報告されている。水成層を直接掘り込んで造られており、埋土は水漬きの痕跡をとどめるものもある。土坑群の性格は特定されていないものの、耕作にかかる遺構とみた方がよさそうである(大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2018a)。したがって、調査地は三津屋城の範囲に含まれない。三津屋城が存在したとすれば、調査地南側にあたる三津屋集落が位置する微高地上(字「馬洗」「東口」「前田」あたり)がふさわしいであろう。[岡本]

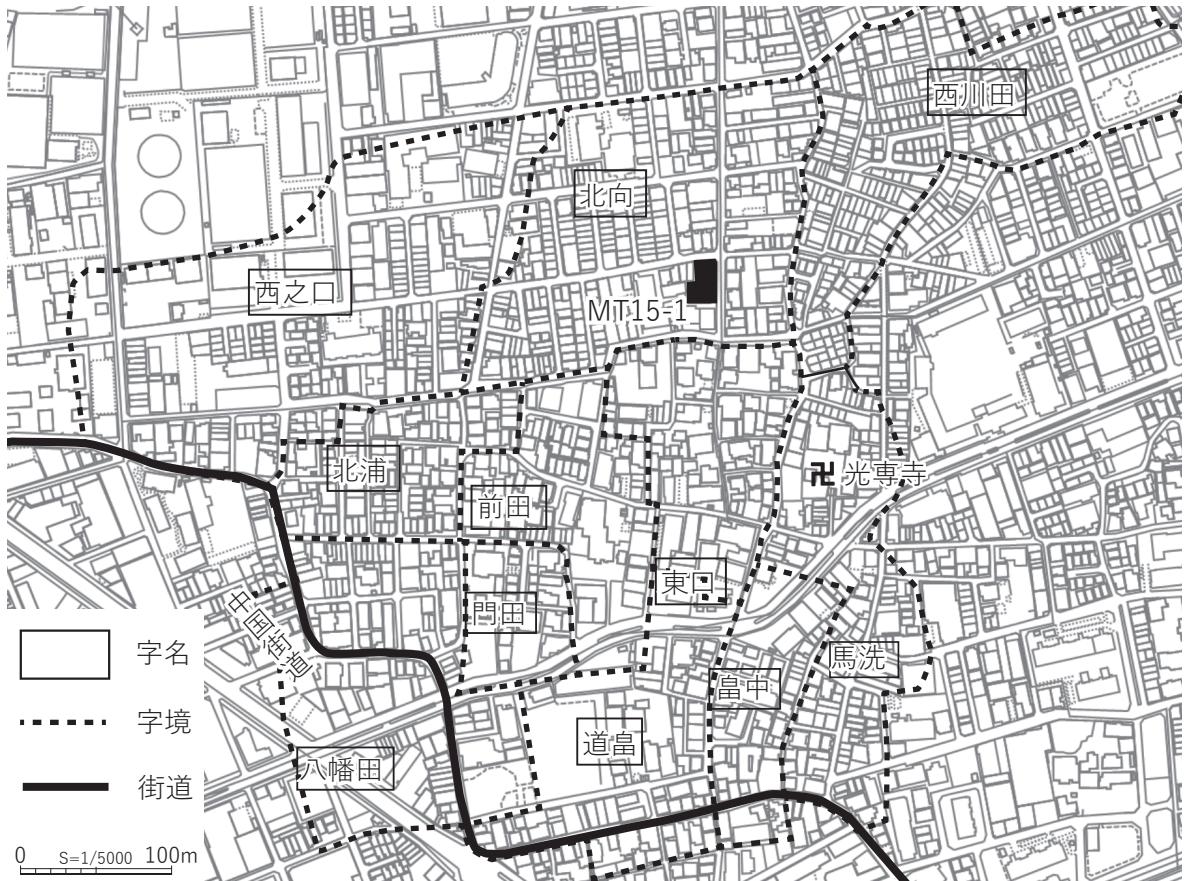


図12 三津屋における小字と発掘調査の位置

尼崎・伊丹～大坂交通を抑える要衝 おお わ だ じょう	⑥大和田城	<p>【所在地】西淀川区大和田 【標高】-0.9m 【年代】戦国期 【城主】安部二右衛門 【交通アクセス】阪神出来島駅より徒歩5分</p>	
--------------------------------	-------	---	--

【概要】神崎川河口部の三角州に位置する大和田は、古来から船舶の碇泊地として知られ、大和田の浦・大和田の浜と和歌に詠まれる景勝地であった。この地にあったとされる大和田城は、本願寺門徒の出城として築かれたという伝承を持つが、荒木村重の謀反の際に織田信長方に降った安部二右衛門の居城であったことが知られる。

【立地】『東摂城址図誌』には、大和田には「城垣内」「城ノ下」という字があることが記されている（図13）ほか、明治20年の地籍図（大阪市建設局蔵）には「下島頭」「北垣内」「中垣内」「奥垣内」「南垣内」「城垣内」「東垣内」の字名が確認でき、城館の存在を示唆している。

現在、大和田城跡の石碑は大和田小学校内に建っているが、小学校から北西に進んだ地点で行われた発掘調査（OW93-1）において、14～15世紀の遺物包含層が検出されており、そこから備前焼擂鉢・瓦質土器が出土している。

【歴史】大和田城については『陰徳太平記』に「大坂本願寺より大和田に出城を構え、下間某を入置、

軍兵を出し郷民を悩乱す。天正三年三月荒木村重大和田城へ押寄、攻崩追打して惣構天満迄打破」とあり、本願寺方の出城として築かれたとされるが、確かな史料としては『信長公記』にその名がみえる。天正6年（1578）10月、荒木村重は大坂本願寺に通じ、織田信長に敵対したが、その頃「大矢田」に城があり、尼崎・大坂・伊丹へ通路肝要であったという。『信長公記』に記される立地から、「大矢田」は大和田を指しているとみられる。さて、その「大矢田」城主安部二右衛門は信長への帰属を表明したが、彼の親・伯父は「大坂門跡並びに荒木に対し、不儀然るべからず」として同心せず、「二右衛門城の天主へ、両人取り上げ、居城」するに及んだ（⑥-1）。最終的に彼らは二右衛門の策により退去するが、当時

の大和田城には「天主」と呼ばれる構造物があったことがわかる。のちに大和田城は信長方の付城として把握される（⑥-2）が、引き続き安部二右衛門が城主を務めている（以上、金田2005より）。

【評価】『信長公記』などの記述から、本願寺方の出城が大和田に築かれ、のち信長方の城となったことがわかるが、発掘調査ではそれ以前の資料が検出されており、『信長公記』にあるように、尼崎・伊丹方面との交通の要衝として集落が展開していた可能性もある。

安養寺・善念寺・浄円寺という、中世に創建された伝承を持つ寺院が密集するエリアと、字「城垣内」の位置は、隣接しているが別の位置である。字「城垣内」が大和田城の位置とすると、先行して展開した大和田集落に隣接して、大和田城が築かれたとみることができる。〔谷口〕

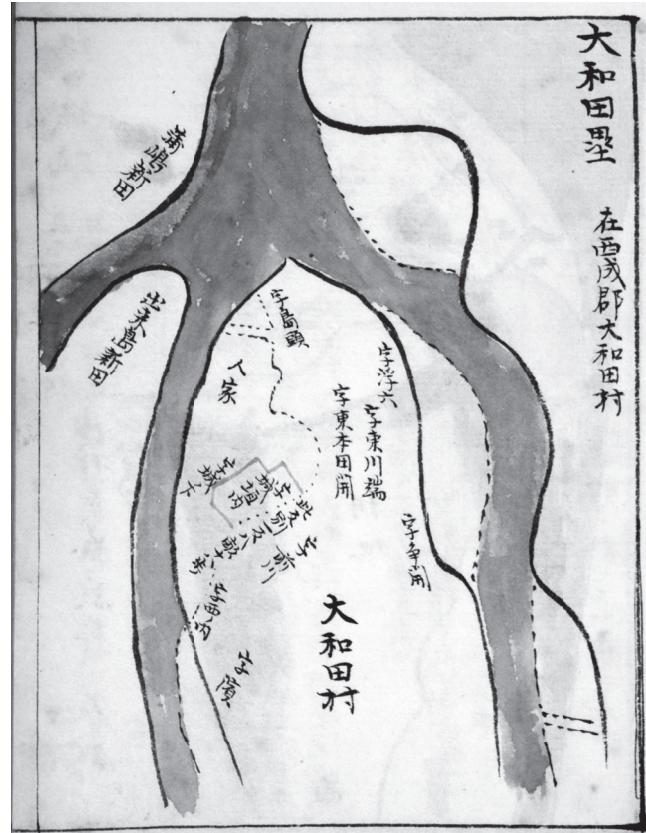


図13 『東摂城址図誌』より大和田城



図14 大和田における小字と試掘調査の位置 (岡本作図)

細川高国・足利義昭が入城か
うら え じょう
⑦ 浦江城

【所在地】北区大淀中
【標高】-1 ~ 0 m
【年代】享禄4年(1531)、元亀元年(1570)~同3年(1572)
【城主】細川高国、足利義昭
【交通アクセス】JR福島駅より徒歩15分



【概要】中島地域の城郭群の一つと考えられ、享禄4年(1531)の大物崩れの戦いと元亀元年(1570)の野田・福島合戦において使用されたことが確認できる。

【立地】低湿地に位置している。近世の浦江村は北村と南村という二つの集落から構成されていた。北村は梅田街道が通過することが特徴で、南村は「浦江聖天」と称される了徳院がありカキツバタの名所として知られる。

【歴史】『細川両家記』によれば、享禄4年(1531)の大物崩れの戦いの際に細川高国陣として「うらい」が用いられているが、これは浦江を指すと考えられる(⑦-1)。元亀元年(1570)の野田福島合戦においては「九月十二日に中嶋の内浦江と申所に古城候。御所様御入城也。」とあり、かつて細川高国が布陣した浦江の「古城」に足利義昭が入ったという(⑦-2)。『年代記抄節』元亀3年4月13日条は、「於中島城、三好為三、香西・三好左京大夫ト申合、細川右京大夫同心可有由申、然共同心無之間、城ヨリ出、ウラエト申所ニ相城ヲコシラヘ、中嶋城ト相戦」とあり、所在地不明の「中嶋城」を攻める拠点として浦江城が築かれている(⑦-3)。

近世地誌で浦江城に言及したのは、暁鐘成が著した『摂津名所図会大成』である。勝樂寺の項目に「又一説に長慶山と号することは三好長慶の菩提寺なりしゆへ斯は号くるとぞ、今其事実詳ならず、又此寺の西に城の内と字する地あり、是もいにしへ砦など有し古跡なるべし」とある。同時代史料において三好長慶と浦江とのかかわりを確認することはできないものの、「城の内」の字とあわせて注目される(⑦-4)。なお、19世紀ごろに作図されたと考えられる「方位分間西成郡福島之図」(大阪歴史博物館蔵)には、勝樂寺に「長慶山 三好氏古セキ」と記されており(図15)、近世の段階で三好氏に関わる伝承が存在したこと自体は確実である。

【評価】浦江城の所在地に関する情報は、『摂津名所図会大成』や『大阪府全誌』(⑦-5)の勝樂寺の西側という記載が唯一と言っても過言ではない。なお、『摂津名所図会大成』が記す字「城の内」は、明治19年(1886)の地籍図(大阪市建設局蔵「明治拾九年大阪府管下摂津国西成郡浦江村地図」)上では確認できない(図16)ため、明治期にはすでに統合されて消失していた可能性がある。したがって、浦江城の所在地を厳密に特定することはできない。ただし、江戸時代に梅田街道と呼ばれるようになる街道が中世の段階で成立していたと考えられる(大澤2017)ことから、城の選地として合理的といえる。したがって、当地に浦江城が存在した可能性は十分にある。[岡本]

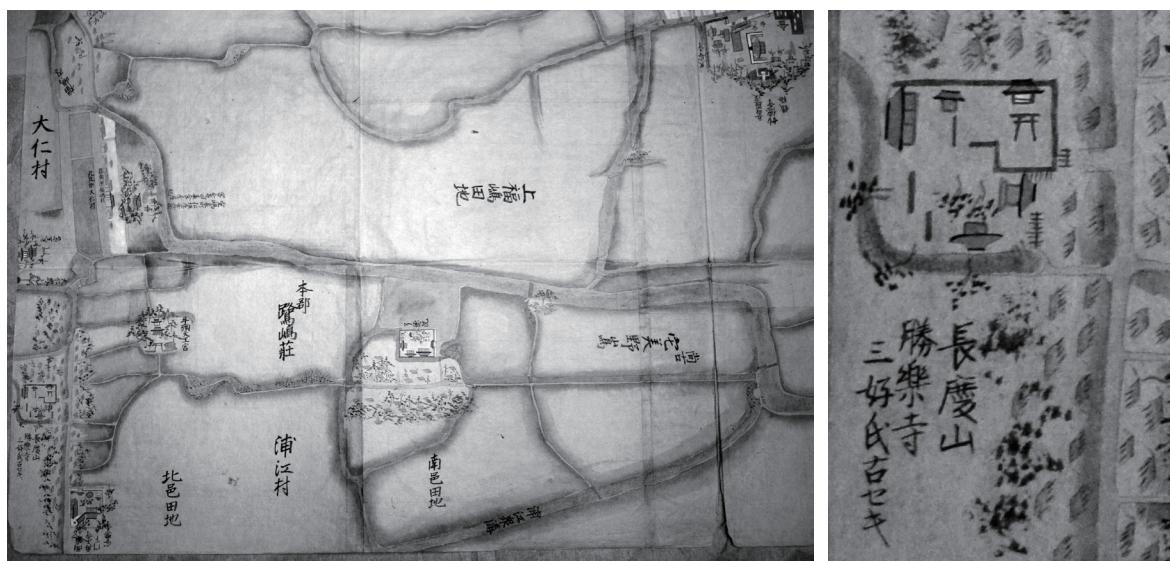


図 15 方位分間西成郡福島之図（大阪歴史博物館蔵）より浦江村（左）と勝樂寺（右） ※いずれも上が東

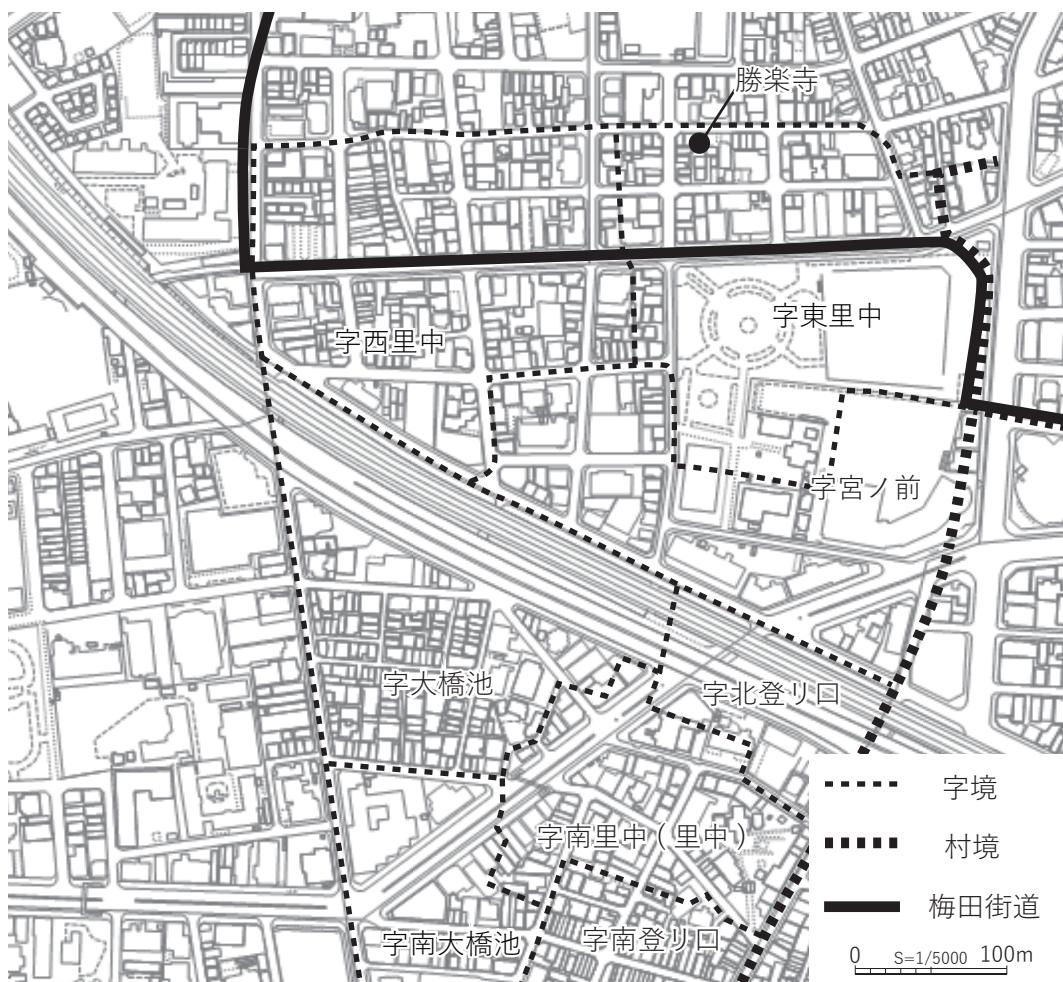


図 16 浦江村（居村部）の小字と梅田街道